

応用生態工学研究会ニュースレター No. 6

Ecology and Civil Engineering Society (E C E S)

1999年3月30日(火)発行

〔発行所〕 応用生態工学研究会事務局：〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

〔発行者〕 応用生態工学研究会 (編集責任者: 幹事長 谷田一三, 事務局代表 熊野可文)

第6号 目次

はじめに

1. 「ワークショップ/水辺の生物群集と保全」開催報告
  2. 第7回幹事会・第6回理事会報告
  3. 札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」開催案内
  4. 会員アンケート調査(結果報告)
  5. 「国際応用生態学会議」(カルカッタ)報告
  6. 会誌編集委員会便り
  7. いろいろなニュース
    - (1)平成11年度自然共生研究センター活用研究の公募について
    - (2)国内学会・シンポジウム等
      - ・「1999年度新しい河川整備・管理の理念とそれを支援する河川技術に関するシンポジウム」(6月中央大学多摩キャンパス)
      - ・「ヨシ原に関する国際ワークショップおよび公開講演会」(6月琵琶湖)
    - (3)海外学会・シンポジウム等
      - ・「復元生態学会」(9月サンフランシスコ)
    - (4)新著紹介
      - ・「増補 応用生態工学序説」廣瀬利雄監修
      - ・「環境アセスメントここが変わる」
      - ・「地理的情報システムを学ぶ」中村和郎他編
      - ・「水循環と流域環境(岩波講座,地球環境科学7)」高橋裕・河田恵昭編
      - ・「日本産土壌動物、分類のための図解検索」青木淳一編著
      - ・「水辺環境の保全—生物群集の視点から—」江崎保男・田中哲夫編
    - (5)雑誌論文紹介
      - ・「生態工学は河川を救えるか」廣野喜幸・清野聡子・堂前雅史、『科学』(収載)
  8. 事務局報告
- 1999年度研究会スケジュール

はじめに

99年度を迎え会員の皆様に以下お願いします。

1. 99年度年会費の振込を!

当研究会の99年度(1999.4/1~2000.3/31)年会費未納の方は、振込をお願い申し上げます。

年会費:正会員(5,000円)、学生会員(2,000円)

賛助会員(1口につき100,000円)

[振込先]

・郵便振替口座

(口座名称) 応用生態工学研究会

(口座番号) 00140-7-404275

・銀行口座

カノヨシミ

(口座名称) 応用生態工学研究会 熊野可文

(銀行名) あさひ銀行麹町支店

(口座番号) (普通) No.3686728

注1) 振込に当たっては、各会員の個人名が分かるよう記入して下さい。

注2) 99年度のなるべく早い時期に振込をお願いします。

2. 勤務先住所変更連絡を!

勤務先・住所等の変更の連絡を事務局まで。

3. 札幌・福岡の実行委員募集!

今まで東京・名古屋・大阪に編成してきた『研究実行委員会』を、99年度は札幌と福岡にもつくりたい。参加希望者は、事務局までご連絡下さい。実行委員資格条件無し(但し無給)。

4. 会誌『応用生態工学』団体購読者募集!

3月13日の理事会において、会誌『応用生態工学』の団体購読希望者を募集することになりました。99年度から開始します。公共図書館・大学図書館・研究機関等が対象となります。会員の関係する機関にご紹介下さい。

団体購読:会誌『応用生態工学』定期購読(年2号各1冊、年購読料10,000円)

申し込み:団体名(正式)、郵便番号、住所、TEL、FAX、E-mail、担当者所属及び氏名を事務局まで、郵便・FAX・E-mail等で申し込み下さい。申し込み後、購読料請求書等を事務局より郵送し

ます。

#### 5. 札幌基礎講座受講者応募開始! (P7参照)

札幌で基礎講座「多様性と保全の生態学」を7月17日(土)~19日(月)に、北海道大学学術交流会館で開催することになりました。受講者申込の受付を開始いたします。

#### 6. 第3回総会・研究発表会の日程決まる!

1999年9月18日(土) 科学技術館サイエンスホール(東京北の丸公園)

19日(日) — 同 上 —

20日(月) 霞ヶ浦現地見学

### 1. 「ワークショップ/水辺の生物群集と保全」開催報告

応用生態工学研究会が主催する大阪での初のワークショップ「水辺の生物群集と保全」が1998年12月4~5日、大阪府建築健康会館で開催されました。

本講義は、オーガナイザーである江崎保男(姫路工業大学)幹事の「本研究会は多くの分野の方々から構成されており、ワークショップは講演を聴くだけでなく“多分野の意見のぶつかりあい、争いの場”である」との情熱あふれるあいさつで開幕し、1日目が「水田」、2日目が「河川」における生物群集とその保全について講演がありました。それぞれについて農業土木及び河川水理の立場からコメントをいただき、生態学に偏らない内容となりました。

受講者は100名あまりで、民間のコンサルタント会社からの参加がもっとも多く、官公庁や財団法人の方々も参加され、学生の参加も多く見られました。

また、両日とも受講された方々には、修了証書が各先生方から手渡しで渡され、アットホームな雰囲気ワークショップが終了しました。

以下に各講義の概要をまとめます。

#### ●「ため池の植物群落—その成り立ちと保全」角野康朗(神戸大学)

ため池に生育する植物種は年々減少しており、その原因は埋立によるため池の消滅や堤体の改修工事などが挙げられる。ため池を残すには社会的な合意が必要であり、それには経済的・制度的な裏付けが必要である。また、改修工事では生態系への負荷の削減、復元力の維持などが課題となるが、それには生態学と農業土木の技術の融合が必要である。

#### ●「ため池のトンボ群集」上田哲行(石川県農業短期大学)

日本に生息するトンボの約半数の80種がため池を生息場としている。ため池のトンボの生息環境を保全するには、ため池内外の植生が最も重要となるが、具体的にどのような植物がどの程度必要であるかは

明確になっていない。また、1つのため池に着目するだけでなく、周辺のため池を考慮した広域的な保全計画が必要である。

#### ●「サギが警告する田んぼの危機」藤岡正博(農業研究センター)

日本には6種類のサギ類が生息するが、圃場整備などが原因で主にチュウサギが田んぼから姿を消している。チュウサギは河川などで魚を採ることが少なく、主に餌とするドジョウやカエルが圃場整備で減少していることが挙げられる。今後、サギ類を含めた水田の生物多様性を保全するためには、休耕田に水を張ることなどが挙げられるが、農家の負担だけでなく、補助金などの法的な整備も必要である。

#### ●「水田耕作に依存するカエル類群集」長谷川雅美(千葉県立中央博物館)

カエルは田んぼに水が張られてから、少し遅れて産卵するなど水田のサイクルにあわせた生活をしている。圃場整備や放棄水田の増加によりカエルは減少しており、それらを餌とするヘビや水鳥も減少している。今後、これらのことを具体的に示すデータを蓄積していくことが、水辺の生物を保全する緊急の課題である。

#### ●「水田における生物多様性とその修復」日鷹一雅(愛媛大学)

ここ数十年で、圃場整備や放棄水田の増加により、水田における多くの生物が姿を消している。今後これらの現状をすぐに元に戻すことは困難ではあるが、農村の社会環境・経済環境を整備していくことが必要である。

また、環境アセスメントで環境調査会社や事業者から貴重種の保全について相談をうけるが、特効薬を期待せずに「一緒に研究しましょう!」という姿勢で挑んでもらいたい。

#### ●「河川の魚類群集」田中哲夫(姫路工業大学)

魚類の生息を良好に維持するためには、河川の瀬と淵の健全な維持が必要である。そのために今後の河川改修では、土地の制限が許されるならば河川の幅をこれまでの2倍にする、できるだけ大きな障害物を河川内に投入するなどにより「河川自ら川をつくらせる」状況を創出することが必要である。

#### ●「河川の底生動物群集」谷田一三(大阪府立大学)

平瀬・早瀬、淵などのハビタットごとに生息する底生動物の種類や生息数が異なる。これらのハビタットにおける「食う—食われる」の食物連鎖の関係を確認していくことが、河川の生物多様性の研究の重要な課題である。

そして、コメンテーターとして、農業土木の立場から瓜生隆宏氏(兵庫県)、河川水理の立場から辻本哲郎氏(名古屋大学)が意見を述べられ、今後の

応用生態工学の課題を提示していただきました。

今回は大阪での初のワークショップであり、我々実行委員もとまどう点も多くありましたが、今後も若い方々を中心とした活発な意見交換ができるワークショップを目指したいと思います。

[加藤賢次：大阪研究実行委員会、日本工営(株)]

多様な参加者と多様な問題点、これらをいかに整理し、活発な論議へと発展させるのか、多くの楽しみな課題を背負ってのワークショップでしたが、雄

弁かつ親切な講演者・コメンテーターと熱心な受講者とのあいだで、予想以上に熱のこもった論議が丸1日半にわたって繰り広げられました。話題は、田んぼと川の生態学・生物多様性の認識論から保全の技術論・教育・行政施策まで広くおよびました。異分野の人たちが応用生態工学という新たな学問領域の創出にむかって力強い一歩を踏み出し得たのではないかとひそかに思っております。[研究会幹事 江崎保男：姫路工学大学]



・ワークショップでの討議風景



・講座終了後、修了証書が各講師によって手渡された。

## 2. 第7回幹事会・第6回理事会報告

1998年度末にあたり、応用生態工学研究会では、3月4日に第7回幹事会(事務局)、3月13日(土)に第6回幹事会(中央大学駿河台記念館)を開催しました。以下にその要旨を報告します。

### (1) 第7回幹事会

開催日時：1999年3月4日(木) 17:00~20:30

会場：応用生態工学研究会事務局

出席者：谷田、江崎、角野、中村、鷺谷、(事務局熊野)

- 議題：1. 5ヶ年計画について  
2. 98年度総括  
3. 99年度事業計画  
4. 会誌編集委員会関係  
5. 第3回総会研究発表会  
6. その他

### 幹事会5ヶ年計画(案)

#### [1] 各委員会報告

##### 1) 会誌編集委員会

会誌『応用生態工学』Ecology and Civil Engineeringの創刊号(Vol.1 No.1)は1998年11月30日に発行し、現在第2号編集中である(1999年4月末に発行予定)。会誌の将来計画については、もう少し様子を見る必要があると思われる。現時点では、現行の刊行方針でさらにもう1年間進めて(2巻2号まで)、改め

て将来の方向を考えたい。理想的には季刊(年4号)を目標とするということもあり得るが、現状の投稿状況のままでは困難と思われる。

今回各委員会において、その活動方針の検討が行われ、それが会誌への投稿機会を増加させるものと期待しつつ会誌の将来について検討を続けて行きたい。

##### 2) 普及委員会

講座及び現地セミナー等については、98年度は4回実施し、合計487名の参加者があった。内容的にも多くの支持を得られ(勿論物足りなさや、多くの改善要請も受けている)、参加費などの収入で必要経費をまかなうという基本運営方針もほぼ達成できた。これからの将来計画については、98年度のやり方がとても良いとか、問題があるともまだ言える状況にはないため、99年度もう一年同じような形で実施し、会員の意見を聞きながら、検討して行きたい。

98年度に実施した際の基本方針を整理すると以下の通りである。

- (1) 会員のニーズに応じて、講座・現地セミナー等を実施する。
- (2) 土木は生態を、生態は土木を、従来の専門分野外について相互に基礎的事項を学べる場をつくる。
- (3) 複数の分野の講師等によって、共通の課題やプロジェクトについて議論をし、相互理解が出来

る場をつくるよう努力する。

- (4)東京だけでなく、他の都市・地域での開催を促進する。
- (5)各地に「研究実行委員会」を編成して実施する。
- (6)財政的には、参加費等の収入と会場費・講師謝金等の経費が等しくなるよう運営する。等々。

### 3) 交流委員会

- (1)学術交流：生物・生態学、土木工学のほか応用生態工学の基盤となる造園学、農学、水産学、地理・地形学、建築学など様々な分野との交流を図り、それぞれの分野の底辺を拡大するとともに、学際的分野を模索する。トピックスを限定した「ミニシンポジウム」を企画・開催し、場合によっては会誌の特集との連携活動とする。
- (2)研究者・技術者・行政の交流：応用生態工学の成果は実践されてこそ意義がある。学術として出てくる成果を技術や政策・事業として応用できるよう、また技術面から期待される学術の進展を図れるような交流の場をもうける。具体的には、研究者が技術者や行政側からどのような学術が期待されているかを知り、技術者や行政者が今後応用の可能性のある学術がどのようなレベルに達しているかを知る機会をもうけ、そのなかの議論から学術と技術のインターフェイスをどのように確立してゆくかを検討する。この面では研究開発委員会との連携が必要であろうし、普及委員会の講座・セミナーもこの交流の一端を担うものと考えられるのでこれと連携する。
- (3)市民との交流：環境管理には市民の合意や協力が必要で、とくに普及委員会の現地セミナーなどは交流と理解に大きな役割を果たす。
- (4)国際的な交流：土木事業に関連して自然環境の保全や保護に先進的な事例の現地見学や関係者との交流の機会を探りたい。海外で開催される応用生態学や復元生態学、生息環境にかかわる河川工学・景観管理学等の会議やシンポジウムなどへの参加も視野に入れたい。これらへの派遣の便宜を図るとともに、報告などを通じた情報の疎通を図る。また、応用生態工学研究会が国際的な関連研究機関に対する日本の窓口としての機能が持てるよう努力して行く。なお、近隣諸国（韓国、中国、東南アジア諸国等）との交流を積極的に行いたいという考えもある。

### 4) 研究開発委員会

当研究会で自主的な研究を実施するにあたっては、自主的であると共に、会員の公平性と公開性を基本原則とする。取り上げる研究課題については、個別の利害関係の強い課題や対象物（地域等）は研究的

レベル外の価値判断が伴う可能性があることから避けるものとし、パイロット的な内容の提案が出来るシンクタンクとしての位置を確保できるものとする。

当面の活動としては、若手のための『奨励研究』を実施するとともに、研究者と実務者が共同して取り組める課題及びその実施体制の検討を進める。

委員からは以下の研究課題が提案されている。

- (1)野帳・標本管理システム
- (2)データ管理（データベース化、GISの利用）
- (3)定量調査手法の検討
- (4)建設事業等により環境インパクトが与えられた場合に、自然環境がどの応答するのか（インパクト・レスポンス）。また、その予測、評価手法の開発。
- (5)地域の生態系の典型性の視点から把握する場合の注目種の選定手法の開発。
- (6)事業実施後の効果的なモニタリング手法の開発。
- (7)環境教育
- (8)その他

なお、受託事業については、上記自主的研究を実現するため実施するものとし、発注者には当研究会の基本原則を理解していただくことが前提であり、今後関係者の協力を得て慎重に検討する。また、各種研究助成基金については、積極的に対応する。

### 5) 大会運営委員会

総会・研究発表会は、今まで2回開催してきたが、当面前年度までと同様の方法で実施継続する。研究発表会については、『一般講演』とともに、特定の課題を設けてその発表とともに報告と議論を行う

『シンポジウム』形式について試行し、応用生態工学の姿が見え、又将来展開が期待できるようその企画運営を行う。

### 6) その他（幹事会など）

当研究会発足時に討議した、「応用生態工学研究会」から「応用生態工学会」への展開については、『学術研究団体』の登録が課題となる。日本学術会議の「登録のための要件」によれば、

- (1)設立：科学者により構成されている団体であること。
- (2)活動期間：学術研究の向上発展を図るための活動が引き続き3年を超えて行われていること。
- (3)構成：次の数以上の科学者が構成員であること。

第4部（理学）	300人
第5部（工学）	500人
第6部（農学）	200人

### (4)活動状況：

- ①研究発表会を年1回以上開催。
- ②学術研究論文発表刊行物を年1回以上刊行。査読制度が必要。

③総会年1回以上開催。等とある。

したがって、

[応用生態工学研究会]

1997年度 (発足) 第1回総会・研究発表会

1998年度 第2回総会・研究発表会、会誌創刊号刊  
行(1巻1号)

1999年度 第3回総会・研究発表会、会誌2巻1号、  
2巻2号予定

2000年度 第4回総会・研究発表会、会誌3巻1号、  
3巻2号予定

2001年度 一5月、学術研究団体への登録申請可能  
ちなみに、当研究会の1999年3月3日現在の会員  
数は以下のとおり。

個人会員：905人(内学生会員：30人)

賛助会員：58法人

法人化(社団法人等)に関しては、学術研究団体  
への登録とは、直接には関係しない。

5ヶ年計画に伴う各委員会経費や当初経費は、  
1997年度より繰り越している研究会予算より特別予  
算を組みこれに当てる。

[2] 5ヶ年計画(案)

(幹事会提出文案は下記理事会の審議により6月3  
日次回理事会までに修正するためニュースレター次  
号に掲載予定)

[3] 1999年度活動方針(案)

以上の5ヶ年計画検討結果に基づき、1999年度の  
活動方針(案)を以下示す。

1) 会誌編集委員会関係

会誌『応用生態工学』は、1巻2号を極力早く刊  
行するものとし、2巻1号・2号を刊行する。

ニュースレターを発行する(4回予定)。

2) 普及委員会関係

講座及び現地セミナー等は、98年度と同様4回程  
度開催するものとし、以下の各案を検討実施する。

「生態学/保全生態学基礎講座(仮称)」

開催場所：札幌

開催時期：1999年7月(2日～3日間)

講師：鷺谷、橋川、(開催地研究者)

「霞ヶ浦現地見学」

開催場所：霞ヶ浦

開催時期：第3回総会・研究発表会と連続し  
1999年9月20日(月)

講師等：地元市民団体関係者、鷺谷、角野等

「実務者のための多自然型川づくり基礎講座(仮  
称)」

開催場所：東京

開催時期：秋期(10月～11月ごろ)、集中的に日  
程を組むか、週1回(計5回程度)と  
するか、検討して決める。

講師：河川工学(水理学)研究者、生態学研  
究者、行政担当者、河川生態学術研究  
担当者、水源地生態研究担当者、民間  
技術者

なお、この他九州福岡で河川の水理・水質をテ  
ーマとする案、名古屋で藤前干潟・万博等テ  
ーマとする案などが出されており、今後これら  
を調整し、決定しだい連絡する。

3) 大会開催運営委員会関係

第3回総会及び研究発表会を以下実施する。

開催場所：東京、霞ヶ浦(現地)

開催時期：

1999年9月18日(土) 総会・研究発表会

19日(日) 研究発表会

20日(月) 霞ヶ浦現地見学

4) 交流委員会関係

(1)各分野交流ミニシンポジウム(仮称)の開催

(各分野の最近の動向の把握と問題意識の共有  
を目指して)

(2)国内における各学会と共に、国際的な会議やシ  
ンポジウム等をニュースレターで案内する。国  
際会議等については、現時点で以下の情報があ  
る。

①生態水理学(Ecohydraulics,1999年7月、米  
国ソルトレイクシティ)

②復元生態学会(Ecological Restration,1999年  
9月、米国サンフランシスコ)

(3)国際会議等への若手研究者あるいは技術者の派  
遣につて検討を行う。

5) 研究開発委員会

(1)奨励研究の実施

課題：応用生態工学に係わる研究・提案

対象者：若手研究者・実務者(自ら研究計画を  
立案しそれを実行できる会員)

費用：一件30万円(5件以内とし、研究会よ  
り支給)

時期：ニュースレターなどで募集

8月 応募締め切り(申請には、研究  
計画書提出)

9月 審査決定(研究開発委員会で担  
当)

(研究報告書の提出)

(研究成果の発表—研究発表会等)

—以上については、理事会承認があれば早急に  
詰める。

(2)自主的研究については、その課題及び実施体制  
及び受託の可能性等を具体的に検討し、99年度  
実施できる体制ができれば実施する。

## (2) 第6回理事会

開催日時：1999年3月13日(土) 14:00~17:45

会場：中央大学駿河台記念館

出席者：川那部、大島、橘川、廣瀬、池淵、小倉、須賀、玉井、山岸、辻本(谷田幹事長代理)、(事務局 熊野)

審議・決定要旨：

### 1. 各委員会の構成

「会誌編集委員会」「普及委員会」「交流委員会」「研究開発委員会」「大会開催運営委員会」の各委員については、

- ①これまで検討してきた各委員については了承。
- ②これから、2ヶ年の任命にあたっては、各委員会で『委員長を決めること』『担当理事を任命する必要があるか検討すること』とする。
- ③各委員会の運営については、各委員長が強い裁量権限を持つものとする。

### 2. 5ヶ年計画

幹事会の5ヶ年計画(案)に対する主な意見は以下の通りであった。

『会誌編集委員会』

・学術研究団体の登録の審査から見ると、会誌にオリジナル論文がキチット掲載されていることが要点である。

・原著論文が1本というのでは、まだまだだ。  
・第2回研究発表会における講演発表の中に、手を加えれば会誌論文として採用できるものが数件あった。これを大いに活用すべきである。

・年4号も出せるようになるのか？

『普及委員会』

・いままで実施してきた東京・名古屋・大阪から、さらに各地に開催場を増やしてゆくべき。

『交流委員会』

・会員の利益と他への貢献と、両面での位置付けを考慮すべき。

・国際交流については、例えばJICAが相談できるくらいの存在になるべき。

・試行錯誤でいろいろやってみては。

・土木学会や日本生態学会などと学术交流(共催など)を考慮すべき。

『研究開発委員会』

・河川生態学術研究及び水源地生態研究に対して当研究会として、どう位置づけ又バックアップするのか検討する必要があるのではないか。

・河川以外に、道路、港湾、都市等の分野も入れるべきではないか。

・自主的研究については、“独自に研究開発”するというより、むしろこの研究会は、土木や生態など各分野が議論や交流を出来る場を提供することにそ

の役割があるということに主眼を置くべきではないか。従って、“自主的研究・受託事業の積極的な推進”というよりも、(いろいろな分野や関係機関との共同研究等)研究すべき課題を上げつつ、慎重な対応をするということではないだろうか。

・ある研究課題があった場合、(我々が扱う研究対象の性格から)一カ所だけで行うのではなく、複数カ所での検証の必要性があるのではないか。

・この研究開発の内容については、会誌への記載を考慮すべき。

—— 研究開発委員会については、さらにその内容を詰めるものとする。

『大会開催運営委員会』

(特に意見無し)

『その他』

・広報の項目がないが、幹事会が全体として企画調整する必要がある。

・各委員会は相互に関連する事項があることから、その調整及び連携を図る。

—— 以上『5ヶ年計画(案)』に対しては、多くの意見が出され、各委員会及び幹事会においてさらに検討を加え、来る6月3日の次回理事会で再度審議するものとした。

### 3. 98年度総括

1) 会員入会状況(3月3日現在会員905名、賛助会員58法人)

2) 収入・支出(円)

	総収入	総支出	差額
97年度	34,503,135	17,547,014	16,956,121
98年度(予測)	19,012,235	20,578,094	-1,565,859
		[99年度末残額]	15,390,262

以上承認。

3) 事務局代表給料

予算通り70万支出承認。

### 4. 99年度事業計画

1) 99年度事業計画

5ヶ年計画(案)に示される基本事項承認。ただし、5ヶ年計画に伴う各委員会再検討事項については、その整合を図る。

2) 99年度予算案

99年度収入合計	20,190,000円
99年度支出合計	20,190,000円
99年度特別予算	5,000,000円
(97年度からの繰越金より支出)	
99年度総支出	25,190,000円

以上、承認。(付帯意見：これから、通年化する費用として各委員会開催費及び奨励研究費があるなら、特別予算とせず通常予算に算入すべきである)

5. 会誌編集委員会関係

1) 現在編集集中の会誌1巻2号については、その刊行が1999年4月末以降になることから、これを、2巻1号とする。

2) 団体購読(1団体年額 10,000円)承認。ただし、これから季刊(年4号)等となるなら会員年会費と合わせて変更を検討する。

3) 創刊号寄贈及び団体購読者募集についてその実施を承認した。

4) 会誌販売価格については、3,000円/冊とする。

### 6. 第3回総会・研究発表会

内容については、これを承認する。

日程については、理事会後日程調整し、以下のよう決定した(99.3/19)。

#### 【第3回総会・研究発表会】

開催日時：1999年9月18日(土)サイエンスホール

19日(日)サイエンスホール

20日(月)霞ヶ浦現地見学会

会場：科学技術館サイエンスホール

東京都千代田区北の丸公園内

地下鉄竹橋駅下車徒歩7分

### 7. 「ヨシ原に関する国際ワークショップおよび公開講演会」について

主催者(関西自然保護機構)からの共催申し入れを承認する。今後ニュースレターでの会員への連絡及び開催結果報告を行う。

### 8. 次回(第7回)理事会

第3回総会で、2年間の任期が来る役員人事について次回理事会で審議する。及び5ヶ年計画について各委員会での検討結果を報告・審議する。

第7回理事会 1999年6月3日(木)

14:00~17:00 中央大学駿河台記念館

### 3. 札幌基礎講座『多様性と保全の生態学』開催案内

99年度最初の研究会活動として、鷺谷いづみ幹事を主任講師とする基礎講座を以下開催します。受講希望者は、事務局まで申込み下さい。特に土木学専攻の方には、この生態学基礎講座への参加を呼びかけます。

※開催日：1999年7月17日(土)~19日(月)

※会場：北海道大学学術交流会館

※講師：・鷺谷いづみ(筑波大学生物科学系助教授)植物生態学、保全生態学〔主任〕  
・橘川 次郎(オーストラリアクイーンズランド大学名誉教授、研究会副会長)保全生物学  
・谷田 一三(大阪府立大学総合科学部教授)河川湖沼生態分類  
・中村 太士(北海道大学大学院森林管理保全学講座助教授)流域保全

※講座内容：(下記プログラムは予定)

(1日目)7月17日(土)

1時限\*13:00~14:15

『生物多様性と健全な生態系の持続：目標と現状』

〔講師〕鷺谷いづみ(筑波大学)

2時限\*14:25~15:40

『生物多様性の危機の現状と要因』

〔講師〕鷺谷いづみ(筑波大学)

3時限\*15:50~17:05

『河川生態系における食物連鎖とその多様性』

〔講師〕谷田 一三(大阪府立大学)

4時限\*17:15~18:30

『多様性の生態学1. 生物群集を理解する』

〔講師〕橘川 次郎(クイーンズランド大学)

(終了後懇親会)会場：札幌アスペンホテル

札幌市北区北8条西4丁目5番地 TEL.011-700-2111

(2日目)7月18日(日)

5時限\*9:00~10:30

『多様性の生態学2. 多様性を支配する要因を探る』

〔講師〕橘川 次郎(クイーンズランド大学)

6時限\*10:45~12:15

『絶滅過程を科学する一群体群の衰退と絶滅』

〔講師〕鷺谷いづみ(筑波大学)

7時限\*13:15~14:45

『生物多様性保全のための管理と計画』

〔講師〕鷺谷いづみ(筑波大学)

8時限\*15:00~16:30

『水辺林の更新動態と生態学的機能』

〔講師〕中村 太士(北海道大学)

(3日目)7月19日(月)朝8:00出発~現地解散(現地見学先検討中)

この案内により受講希望者の受付を開始しますので事務局まで郵便・FAX・Eメール等で申込み下さい。会場の関係から定員180名、先着順とします。申込みには氏名、所属、会員・非会員、連絡先郵便番号・住所、電話番号、FAX番号をお忘れなく。

注1) 日程及び会場は決まりましたが、プログラム等はこれから内容をつめますので変更の可能性があります。

注2) 受講料につきましては、参加しやすいように設定する予定です。申込者には後日連絡します。受講料には、交通宿泊費、昼食、懇親会費用は含みません。

注3) 交通手段及び宿泊予約については各自でご手配をしていただくこととなりますので、特に道外から参加の方は、この時期北海道は観光のピークですのでお気を付け下さい。ちなみ

に、飛行機の予約は2ヶ月前からです。

以上、他に質問等は事務局までご連絡下さい。

#### 4. 会員アンケート調査(結果報告)

応用生態工学研究会では、第2回総会(1998年10月31日)の「応用生態工学研究会活動指針」採択に基づき研究会の「5ヶ年計画」を策定するため、全会員にアンケートを昨年12月末実施しました。年末年始と重なったため、回収率は数パーセントと大変低いものでしたが、多くの貴重な意見がありましたので、ここにその主なものを報告します。

- 1) 意見文章は簡略化した。特に論文著者の人名はその敬称を略した。
- 2) 同様意見は、文末に(3)と記し「3名」同様の意見とした。
- 3) 一人で複数の意見がある場合、内容により分割した。

##### [1] 会誌編集委員会関係

1. 「応用生態工学」創刊号が12月18日~21日にお手元に届く予定です。ご覧いただいた印象をお書き下さい。

- 1) 川那部「巻頭言」、伊藤「意見」、竹門「意見」が非常に興味深い。
- 2) 原著論文が少ない。専門から一般とジャンルは広いのでおもしろい。
- 3) 英文論文は読めないの、Abstractに日本語をつけて欲しい。(2)
- 4) 学会でも協会でもない新しい「仕組」からの会報として新鮮な感触を受けた。
- 5) 現場写真またはイメージイラスト等があれば見やすいと思います。
- 6) よくできている。大変参考になり、今後期待できる。(5)
- 7) 研究会方針に対して賛否両論をあえて載せてあり、編集委員の真摯な態度に関心しました。
- 8) 読みやすくまとめられているが、表紙の英語が大きく、ややハードで難しい感じを受けるのが気になった。
- 10) 文体などの統一が望ましい。
- 11) 学術的な印象が強い。
- 12) 土木工学科色あまり感じられない。
- 13) 特定の研究者の論文と意見が多く、川那部「巻頭言」に続くものがあってよいのではないか。
- 14) 他学会からの寄稿があってもよかった。
- 15) 生態色が濃く、土木色が薄いようだが、今後はバランスを取っていかねばならないだろう。
- 16) 装丁にお金がかかっている。
- 17) 伊藤の記事がおもしろかった。このような内容のものを記載する姿勢を持ち続けてほしい。(3)
- 18) 釘宮浩三「・・松枯れの原因はマツノマダラカミキリの伝播するセンチュウが原因・・」とされるが、ある専門書には酸性雨による土壌変化による衰弱化が原因?
- 19) 紙面・体裁・内容ともに期待していたものであった。
- 20) 川那部「巻頭言」を大変興味深く拝見しました。
- 21) 量的にもう少し充実したものであれば、と感じた。
- 22) 上出来、ご苦勞さまでした。長すぎる論文がある。ただし、学術水準は重要。空白が目立つ。埋草を考えるべき。広告はとれないか。
- 23) 仲々良いと思う(失礼ながら最初は期待していませんでした)。

た)。

24) 鷺谷・松田「保全生態学からの提言」興味深く読ませて頂きました。学際分野の研究会として、このような意見をこれからも多く載せてほしい。

25) 巻頭言と伊藤さんが発起人を断った理由を読んで、設立のいきさつがよく分かりました。伊藤さんみたいな一言居士の考え方、行動があらゆる分野に広がれば日本経済も安泰、建設省施策もまちがうことがないと思います。

2. 会誌編集にあたり、これから「特集」を組んで行きたいと考えておりますが、希望する特集テーマをお書き下さい。

- 1) 都会の中の並木や森林(原宿、仙台など)、光のページェントで豆電球をしばりつけているが、その樹林への影響など。都会と緑の生態の相互価値について(CO<sub>2</sub>と並木群との関係等)。
- 2) 生態系に着目した生物多様性保全。
- 3) 里山等二次的自然の保全・管理。
- 4) 生態系ネットワーク(水と緑の回廊等)。
- 5) 海外の自然復元に関する特集。
- 6) 海の植物、動物。「海洋環境保全策」に関するシンポジウム。
- 7) 「多自然型川づくり」工法に関する生態面からの批判、河川面からの批判、そしてそのあり方への提言、評価手法。(3)
- 8) 応用生態工学としての環境倫理。
- 9) 「魚道」
- 10) 「ビオトープ」
- 11) 「環境指標生物」
- 12) 「土壌」について。(2)
- 13) 魚釣りの許可制について。
- 14) 「環境教育」
- 15) 将来応用生態工学分野で検討しなければならない課題。
- 16) 現在は完了し進行中であるが、改善が必要である課題。
- 17) 「河川」「海岸」「道路」に関する論文(2)
- 18) 「アセスメント」(2)
- 19) 「生物モニタリング手法の実践」
- 20) 「エコロード」
- 21) 「ミティゲーション」(2)
- 22) 「林学」
- 23) 河川における植生復元の具体的な事例について。(地域性)(2)
- 24) 農村生態系の保全と農業土木上の問題点について。
- 25) 応用生態工学とはなにか。
- 26) 応用生態工学技術育成体制のあり方。
- 27) 生態/工学のinterface(s)。
- 28) 実例(失敗、成功例)。
- 29) 工学が望む具体的生物データとは?
- 30) データの羅列に終わらない真の生態調査、環境影響評価方法とは?
- 31) 「環境ホルモンと生態系」
- 32) 「生態系とエネルギー」
- 33) 「河川環境(生態系)と開発との共存」
- 34) 「森林環境(生態系)と開発との共存」
- 35) 藤前干潟や三番瀬等生物環境の保全と公共事業に係わるものの。
- 36) 「レッドデータ種の生態」
- 37) 「生物多様性に関する環境の評価方法」

3. 充実した研究会誌の発行のために皆様の積極的な投稿をお願いしているところですが、今のところ必ずしも投稿状況は良くありません。その理由として考えられること、あるいは投稿促進のために今後

配慮すべきこと等がございましたらお書き下さい。

- 1) 理由としては①レベルが高く敷居が高く見えること、②発足したばかりでどのような内容の投稿がふさわしいか判断つきかねること、があげられます。当面は委員の方々が指名原稿依頼して基盤をつくってはいかがでしょうか。
- 2) 宣伝と他誌や書籍への引用。
- 3) 実務レベルでの発表(報文)が加われば発表しやすくなるのでは？
- 4) 個別の動物学、植物学、森林学などの枠を超え生態系としてとらえた場合の学術的な解明、統一的な見解(認識)が図られていない為、それを応用した工学(事業)の分野での提言がなかなか難しいのだと思います。
- 5) 生態系分野はまだ全体的には抽象的で具体的なことが多くないためと考えます。
- 6) 会員に民間企業員が多く、論文を書く余裕がないこと、また仕事上関連する研究をしても客先との兼ね合いもあり発表できないこと、などが考えられる。研究会の知名度が上げれば論文数も増えると思う。(2)
- 7) 研究事例もよいが、実際の地域の現場の声など、会員に身近な話題を求めたらどうか。
- 8) 定期的に出版すること、校閲を早く、受理から出版を短期に。
- 9) 編集方針が見えない、専門が片寄って居ないか。
- 10) まだ出来たばかりだからでは？今後どんどん投稿も増えるものと思います。
- 11) 早く特徴を出すべき。〇〇に関する論文は当雑誌に載ることが重要だと思わせる査読方針を立ててゆく必要がある。
- 12) 外国人会員の加入が必要で、10~20年計画で考慮すべき。それまでの投稿はある程度現会員に依頼する。
- 13) 研究者・専門家の絶対数が少ない。
- 14) 掲載によるメリットの拡大。評価の高揚、発行部数・範囲の拡大、賞。
- 15) 編集委員の充実と論文内容の充実
- 16) 法人化して学会となれば必然的に解決すると思います。
- 17) 発注者が論文にすることを否定することが多く、これが最大のネック。

## [2] 普及委員会関係

1. いままで生態学/保全生態学および河川水理学の基礎講座を開催してきましたが、今後どのような基礎講座を期待しますか。

- 1) 水文現象と生態
- 2) 地形・地質条件と生態
- 3) 河川土木工学
- 4) 環境教育講座—特に水辺環境を中心として
- 5) 環境ホルモン(各分野別) (2)
- 6) 河口域、沿岸域
- 7) 継続希望
- 8) 河川水理学もう一度
- 9) 農業土木、農村計画学
- 10) 水質
- 11) 生態学の基礎、特に生態系生態学
- 12) 保全生態学
- 13) 開発との共存をテーマとした講座希望
- 14) 環境影響評価で貴重種(レッドデータ)が確認された場合の対応(例えば、猛禽類の生態、調査法、工事の影響項目など)
- 15) 論文作成法講座

## [3] 交流委員会関係

1. 研究会は、その目的を達成するためにはいろいろな分野との交流を図る必要があると考えておりま

す。国内においてどのような専門分野(あるいは業種等)と、どのような交流をしたいか提案下さい。

- 1) 造園学会、造園コンサルタンツ協会、発注者
- 2) 農水関係(水田、畑、森林、漁港等) (3)
- 3) 自然保護団体、環境NGO (4)
- 4) 水産分野(2)
- 5) 林学
- 6) 自然保護関係(環境庁、野生生物保護学会等)
- 7) 化学系
- 8) 土木学会
- 9) 地盤工学会
- 10) 砂防学会
- 11) 道路協会
- 12) 各会員を部門化して研究会として作り、他と交流できるか見極めたらどうか。

2. 国際交流については、今後積極的に進めるにあたって対象となる具体的なプロジェクトや国・組織等、提案や情報がありましたらお書き下さい。

- 1) ドイツ
- 2) イタリア
- 3) スイス
- 4) 中国
- 5) 東アジア(特に韓国、台湾)
- 6) 北米太平洋岸(河川生態学では先進地です)。
- 7) 研究旅行の計画実施
- 8) アメリカ・エバングレース(協会)
- 9) 会そのものの体制が確立していないのに早すぎませんか。

## [4] 研究開発委員会関係

1. 当研究会が自主的に研究活動をするに当たって取り上げるべきテーマを提案下さい。

- 1) 小流域生態系研究法(E.Likens,H.Bormann)らの研究に戻ったテーマが重要(個別の工法だけではなく)
- 2) 多自然型河川工法(3)
- 3) ある事業を対象とした事前調査~(工事中)~モニタリングまで一貫した調査
- 4) 土壌資源
- 5) 環境教育について
- 6) 日本の海岸線の保全など、海岸の構築なども考える時代が来ているように思う。
- 7) 本当に「生物にやさしい川づくり」の実践
- 8) 既に破壊された生物の生息場所の復元
- 9) 建設資材と環境汚染について
- 10) 現在使用されている緑化植物(洋芝類等)の環境への影響
- 11) 地域をモデルとした総合的なテーマ(例えば、流域の水・土砂・生態循環)
- 12) 環境保全と開発の共生の考え方、あり方
- 13) 基本的に利害関係のない研究テーマを選ぶべき。生態系に関する基礎的データの蓄積など。
- 14) 多自然型整備の評価方法
- 15) 環境ホルモンと生態系
- 16) 生態系保護のための、具体的な調査・影響・評価の手法
- 17) 生物からみた公共事業のあるべき姿

2. 今、上記自主研究の実施を含めて受託事業の取り扱いを検討しております。この受託事業を行うにあたって意見を下さい。

- 1) あまりあわてない方がよい。但し研究助成は積極的に応募する。

- 2) やるなら総合的モデルで。
- 3) 受注事業は行うべきでない。
- 4) 現在進行中の事業に係わる研究について、事業費でまかなえない部分の補充があれば活動ができ、効率が上がると思う。
- 5) 会も発足したばかりなので、時間をかけて慎重に検討してほしい。
- 6) 企画・提案を広く募集して、アイデアを出した個人・会社が優遇されるようお願いいたします。
- 7) 研究成果の発表権利を誰が(委託者か)有するかが、最初に明確にされることが必要と考える。
- 8) 全情報公開を原則とするべき。

[5] その他(事務局やニュースレター等) ご意見・要望等ございましたらお書き下さい。

- 1) メールやホームページ等即時的情報の提供希望。
- 2) 事務局代表以外の人でももう少し参加してもらえないか(実行委員のコアメンバーなど)。
- 3) 分野別委員会を設置してみたらどうか。
- 4) ニュースレターの作成は大変そう。内容を会誌の中に含め、ニュースレターをなくしてもよいのでは? 冊子になっていないニュースレターはすぐ紛失してしまう。
- 5) 本研究会の中で小流域生態系研究グループあるいは水文生態系グループを発足させたいと考えております。

## 5. 「国際応用生態学会議」(カルカッタ) 報告 Ecological Engineering の国際学会に参加して 伴 幸成(愛知県立碧南高等学校)

昨年(1998年)11月、インドのカルカッタで開催されたICEE(International Conference on Ecological Engineering)に参加してきましたので、簡単に紹介させていただきます。

この国際学会はIEES(International Ecological Engineering Society)の主催で行われました。IEESは1993年にオランダで設立され、現在、本部はスイスに置かれています。ICEEは毎年開催され、これまで、スウェーデン(1991年、1995年)、スイス(1995年)、中国(1996年)、オーストリア(1997年)で開催されており、本年(1999年)は7月にノルウェーのオスロで開催される予定です。

以下の5つの中心テーマのもとに、カルカッタ大会は開催されました。A. 水資源と管理(Water resources and management)、B. 排水管理と養殖漁業(Wastewater management and aquaculture)、C. 風景と都市計画(Landscape and city planning)、D. 都市のゴミ処理(City garbage management)、E. 廃棄物処理と公衆衛生(Health aspect of wastewater and solidwaste management)。

これらのうち、水草などを利用した排水処理を中心としたテーマAと、やはり排水利用の内水面養殖を中心としたテーマBとが、特にこの地域からの発表が集中した分野でした。テーマE(公衆衛生)についても、インドらしい発表が目につきました。

私自身は、カゲロウの大発生に対するダムの影響

について発表しましたが、河川の底生動物については、この大会を組織したKalyani大学の研究者すら参加していませんでした。中心となる分野が、本研究会とはかなり異なっていました。

この学会で特に印象に残ったには、カルカッタのゴミ捨て場を見学に行った現地研修(Case studies cum technical session on Calcutta garbage management)でした。この、現地研修がテーマDに関係していたのでしょうか。バスを4台ほど連ねてカルカッタの巨大ゴミ捨て場を見学に行ったわけですが、ゴミ捨て場こそはスラム中のスラムなので、このような機会が無ければ先進国の研究者は決して見ることができないものでした。私達は、バスから降り、団地でゴミ捨て場の中を進んでいったわけですが、悪臭が凄まじく先進国からの参加者は誰もがハンカチで鼻を押さえずにはいられません。夜間には、発生したメタンが燃えていることもあるそうです。

市街地から運び込まれたゴミがダンプからあけられると、ゴミ拾いの人達が群がり集まって拾い、ゴミの山をなくしていきます。一人一人が拾っていくゴミの量はかなり多く、燃えるものなら何でも拾っていくように思われました。ゴミ拾いの人達は、ゴミ捨て場入口のスラムにも住んでいますが、多くの子供達がゴミ運搬のトラックに便乗して市街地のスラムからやってくるようでした。ゴミ捨て場でゴミを吐き出したトラックは、ゴミを拾った女性や子供と彼らが集めた資源ゴミを乗せて、再び市街地に帰っていくのです。

カルカッタ周辺の広大な湿地はこのようにしてゴミで埋め立てられ、そのような埋め立て地に約10種類の作物が植えられて、農地に変えられていきます。様々なゴミの断片に混じってカリフラワーが特によく育っていました。学会を運営したJana教授によれば、毎年大量に押し寄せるバングラデシュからの難民によって、そのようなスラムの住人が補給されているとのことでした。

日本からの参加者は、私と国連環境計画(UNEP)/国連環境技術センター(IETC)から参加された松本聡さんだけで、専門の研究者は誰も参加しませんでした。この地域からの参加者は、ヨーロッパから参加した有名な研究者達よりも、私達日本人を好んで話しかけてきたように思われます。国際会議などで、日本人は欧米の人達に近づきアジアの人達を敬遠してしまう場合が多いように思われますが、もっとアジアの隣人の期待に応えていくべきではないかと思いました。



・インド・カルカッタのゴミ捨て場—ゴミを拾う人達とそれを写真に撮る学会参加者 (98.11/26伴撮影)

## 6. 会誌編集委員会便り

会誌編集委員長 竹門康弘

創刊号の出版がスケジュール的には2号のタイミングだったこともあり、編集の遅れを取り戻すために1巻2号を2巻1号にスライドすることになりました。昨年からの会員の皆様にはご迷惑をおかけすることになりますが、よろしくご了承ください。この操作により、研究会誌「応用生態工学」の編集スケジュールは、1号が4月末出版、2号が10月末出版を基本とすることにします。

2巻1号の編集状況をお知らせします。掲載予定の報文は、原著論文1本、短報1本、特集(総説扱い)6本、書評1本、文献案内1本です。今回は、辻本哲郎編集委員の編集による「河川の自然復元」をテーマに特集記事を組んでおります。4月末印刷、連休明けに発送の予定ですので、読後の感想などを意見としてご投稿くだされば2巻2号に掲載させていただきます。

また、2巻2号では、中村太士編集委員の編集により「ダム構造物が河川の物理的、化学的および生物的環境に与える影響」を特集記事を掲載予定です。通常の報文も募集中ですので、奮ってご投稿ください。

### 2巻2号(1999年10月末発行予定)の投稿期限

原著論文/総説については、5月末日を投稿期限とします。

短報/意見/書評については、7月末日を投稿期限とします。

### 3巻1号(2000年4月末発行予定)の投稿期限

原著論文/総説については、本年10月末日を投稿期限とします。9月開催予定の研究発表会にて発表される論文を3巻1号に向けてご投稿くださるよう、準備方よろしくお願ひします。

短報/意見/書評については、本年12月末日を投稿期限とします。

以上の期限内にご投稿された報文につきましても、

校閲結果によっては次号以降になりえますので、あらかじめご了承下さい。

## 7. いろいろなニュース

### (1) 平成11年度自然共生研究センター活用研究の公募について

建設省自然共生研究センターより当研究会事務局に以下の公募の案内が来しました。会員の皆様に御連絡します。

#### 〈概要〉

活用研究とは建設省以外の方々に、自然共生研究センターを利用して、研究していただく制度です。公募要領にしたがって申し込み、審査を経て研究を行うことができます。

#### 〈活用研究および研究者の条件〉

1. 研究内容は、自然共生研究センターを活用した、河川の自然環境の保全・復元に資する研究であることとします。
2. 建設省が行う自然共生研究センターにおける研究内容と重複していないこととします(類似の課題であっても独自性があれば可です)。
3. 活用研究者は実験河川の流量の変更、大規模な形状の変更および建設省の研究に影響を与える調査は原則として出来ません。
4. 研究に必要な経費は各自の負担とします。
5. 活用研究者は研究実績を有し、研究内容が優れていることを条件とします。
6. 研究成果は研究実施者に帰属しますが、毎年度の成果は自然共生研究センター年報に報告するものとします。
7. 学術論文等に投稿時は自然共生研究センターで実施した旨を記載するとともに、自然共生研究センターにその写しを送付するものとします。
8. 活用研究者は自然共生研究センターが主催する研究者相互の理解あるいは調整を図るための会議を開催する際には原則として参加していただきます。
9. 活用研究者が自然共生研究センターにおいて研究を実施する際、安全管理は自ら行ってください。

#### 〈活用可能な施設およびデータ〉

1. 活用研究者は自然共生研究センター敷地内の動植物あるいは物理化学的環境を研究計画に沿って調査できます。
2. 建設省が行う次の共通調査のデータを利用することができます。平常時日流量、人工出水時流量、人工出水時水位、流速、雨量、風向、風速、平面図。

#### 〈研究期間〉

活用研究者は平成11年度から平成15年度の任意の

範囲内で研究期間を選定することができます。

〈提出書類〉

活用研究を希望する方は、活用研究応募様式に従って書類を作成し、平成11年5月14日までに書類を提出してください。応募要領は自然共生研究センターに請求してください。

提出場所は建設省自然共生研究センター(〒501-6021)岐阜県羽島郡川島町笠田町官有地無番地(担当:萱場祐一)です。電話0586-89-6035、FAX0586-89-6039

〈活用研究者の決定〉

活用研究者の選定は自然共生研究センター研究アドバイザー委員会の意見を参考に、土木研究所が行います。時期は6月ごろを予定しています。

〈参考資料〉

施設の概要、研究内容の詳細については土木研究所のホームページをご覧ください。

<http://www.pwri.go.jp/> <<http://www.pwri.go.jp/>>

## (2) 国内学会・シンポジウム等

・『1999年度・新しい河川整備・管理の理念とそれを支援する河川技術に関するシンポジウム』の開催と『河川技術に関する論文集Vol.5』の論文募集の御案内(抜粋)

土木学会水理委員会では、河川部会(部会長・建設省土木研究所宇多高明)を平成9年に発足させ、標記シンポジウムを過去2回にわたり開催しました。このシンポジウムでは河川の現場に近い仕事に従事する官庁や民間の技術者、基礎的な研究に従事する者など、官学民の幅広い分野の人々の参集を期待し、昨年度のシンポジウムも多数の参加を得ました。

河川部会では、現場の河川技術と関係する学術分野のインターフェイスとしての役割を積極的に担い、現場の問題の解決を目指した新たな研究課題の提案や、また、新しい研究成果の現場への応用がよりスムーズになるよう活動を行います。さらに、従来の水理・水文学的研究の範疇を越え、河川に関わる学際的な分野、新しい視点を積極的に取り込むとともに、流域全体を視野に入れた研究にも取り組んで行く予定です。

こうした背景のもとに、平成11年度も標記シンポジウムを下記のように企画しました。

1. 開催期日:平成11年6月10日(木)・11日(金)
2. 開催場所:中央大学多摩キャンパス(八王子市東中町742-1)
3. 参加費: 論文集代と併せ、5,000円程度
4. 論文募集テーマ

下記のそれぞれのインターフェイス的な観点や背景とした調査・研究論文の発表を募集します。

- 1) 水理・水文の学術と河川技術
- 2) 従来の河川工学分野と他の関連する専門分野(生態学、治水史、災害科学、他)
- 3) 河道に着目した見方と流域的視点(流域管理、他)
- 4) その他、河川部会の趣旨にあったもの  
シンポジウムでは、河川整備、管理のあり方、技術研究の方向性などの理念を主張する論文をプレナリーセッション(口頭発表)で、技術に関する論文をパラレルセッション(口頭発表)とポスターセッションで行います。

5. 講演応募締切り:平成11年3月19日必着(略)

6. 論文提出と査読(略)

7. 発表方法、講演プログラム

講演者の発表方法、講演プログラムについては平成11年5月上旬までに土木学会水理委員会河川部会のホームページ(<http://130.34.82.205/rivereng.html>)に掲載します。また、シンポジウムの詳細についても同ホームページに掲載しますので、ご覧下さい。

8. 申込み先

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地  
(社)土木学会 研究事業課 磯崎ひろ子 宛  
Tel. 03-3355-3559 Fax 03-5379-0125

9. シンポジウムおよび論文応募に関する問い合わせ先

〒464-8603 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院工学研究科地圏環境工学専攻  
辻本哲郎  
Tel. 052-789-4625 Fax: 052-789-3727,  
E-Mail: [ttsujimoto@genv.nagoya-u.ac.jp](mailto:ttsujimoto@genv.nagoya-u.ac.jp)

「ヨシ原に関する国際ワークショップおよび公開講演会」案内

主催:関西自然保護機構(KONC)

共催:滋賀県、草津市、滋賀県立琵琶湖博物館、  
応用生態工学研究会

協賛:(財)河川環境管理財団、(財)リバーフロント整備センター、(財)ダム水源環境整備センター、水資源開発公団

後援:朝日新聞

目的:河辺や湖沼のヨシ原は、刈り取りや火入れといった人間活動によって維持されてきたという点で、里山の自然のなりたちと似たところがある。近時、こうしたヨシ原は河川改修と、人間の生業と切り離されたことの両面から、衰退の一途をたどり、その回復のために様々な試みがなされてきている。本ワークショップでは、1)ヨシそのものの生態をまず知り、2)そこに住む人間も含む様々な動物とヨシ原の関わりを調べ、3)減少して行くヨシ原を

回復する努力が各国でどのようになされているのかを話し合い、4) 今後のヨシ原の保全に対する考え方を整理する。同時にこれを機会に、5) 一般の人々にヨシ原の重要性を認識してもらうために公開講演会をもち、講師陣の現地指導によるヨシ原エクスカージョンを行う。

日時：1999年6月26日(土)～28日(月)

6月26日(土)

会場：草津市アマカホール(JR草津駅徒歩15分)

1) ワークショップ「世界のヨシ原その現状と未来」

(1) ヨシ原と植物たち

10:00～10:30「ヨシの地下茎の生態」布谷知夫(琵琶湖博物館)

10:30～11:00「琵琶湖沿岸のヨシの分布とその特性について」立花吉茂(花園大学)

11:00～11:30「ヨシ原における埋土種子と植生の関わり」安島美穂(岐阜大学流域環境研究センター)

11:30～12:00「赤野井湾におけるヨシ群落の変遷」柳田英俊(滋賀県エコリテ推進課)、尾藤武(東レエンジニアリング)、小林圭介(滋賀文化短大)

2) 公開講演会「ヨシ原の今」

13:00～14:20「ヨーロッパ、特にフランスにおけるヨシの種多様性」Jean-Marie Gehu(Centre Regional de Phytosociologie Conservatoire Botanique National)

14:20～15:40「ヨシと人の暮らしとの係わり」西川嘉廣(ヨシ研究所)

15:40～17:00「東部カナダにおけるヨシ群落の生態」Miroslav M. Grandtner(Universite Laval, Quebec, Canada)

6月27日(日) 会場：琵琶湖博物館

3) ワークショップ「世界のヨシ原その現状と未来」

(1) ヨシ原と植物たち(続き)

10:00～10:30「絶滅危惧植物から見た琵琶湖湖岸環境の多様性と その特質」藤井伸二(大阪市立自然史博物館)

10:30～11:00「ヨシ原の分断、孤立化とシロハナクサゲの受粉・種子生産」鷺谷いづみ・西廣淳(筑波大学生物科学系)、友部恭子(筑波大学環境科学)

(2) ヨシ原に住む動物たち

11:00～11:30「ヨシ原ラット・スケープの鳥類ハビタットとしての重要性、ラット・スケープとしての保全戦略と測定法」Pascal Raveval(The Greeting Group de Recherches et D'Etudes en Ecologie Terrestre)

11:30～12:00「ヨシ群落と魚類群集」前河孝志(滋賀県水産試験場)

13:00～13:30「霞ヶ浦におけるオオヨシキリの個体群構造とヨシ原間の繁殖成績の違い」永田尚志(国立環境研究所野性生物保全)

13:30～14:00「ヨシ原の火入れがオオヨシキリの社会構造に及ぼす影響」西海功(国立科学博物館)、山岸哲(京都大学動物学教室)

14:00～14:30「ツバメの集団ねぐらとなるヨシ原の重要性」須川恒(竜谷大学深草学舎)

14:30～15:00「ネズミ類のハビタットとしてのヨシ原の意義」村上興正(京都大学動物学教室)

(3) ヨシ原をどう管理し創成したらよいか

15:30～16:00「淀川鶴殿のヨシ原保全」小山弘道(大阪市立大学植物園)

16:00～16:30「琵琶湖開発事業におけるヨシ原の復元について」村尾浩太・福土富之信・浜田英彦(水資源開発公団琵琶湖開発総合管理所)

16:30～17:00「『滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例』の制定と運用について」今井紘一(滋賀県政策調整室)、小谷博哉(滋賀県琵琶湖環境部)、小林圭介(滋賀文化短期大学)

6月28日(月) 会場：琵琶湖博物館

(3) ヨシ原をどう管理し創成したらよいか(続き)

10:00～10:30「人工ヨシ湿地の浄化機能とそれを創出する技術開発」細見正明(東京農工大学工学部応用化学科)

10:30～11:00「霞ヶ浦におけるヨシの人工浮島の研究」中村圭吾(建設省土木研究所河川環境研究室)

11:00～11:30「宇治川におけるツバメの孵地としてのヨシ原の創生」高田直敏(大阪市立大学工学部)、有馬忠雄(河川水辺国勢調査アドバイザー)、白取茂(プレック研究所)、村上興正(京都大学動物学教室)

11:30～12:00「まとめ」

6月28日(月) 13:00～16:00

4) エクスカーション

「近江八幡水郷巡り(屋形船の旅)」

・参加希望者は、当日会場まで。無料。

(問い合わせ先)

小林圭介(滋賀文化短期大学〒527-8533滋賀県八日市市布施町29 TEL.0748-20-2310)

布谷知夫(琵琶湖博物館〒525-0001滋賀県草津市下物町1091 TEL.0775-687-4811)

(3) 海外学会・シンポジウム等

「復元生態学会国際会議 International Conference of the Society for Ecological Restoration」

1999年9月23～25日、米国サンフランシスコ

関心のある方は、事務局までお問い合わせ下さい。

(4) 新著紹介

・「増補 応用生態工学序説—生態学と土木工学の融合を目指して—」、廣瀬利雄(監修)、応用生態工学序説編集委員会(編)、信山社サイテック、本体3,800円：初版が1997年に刊行されてから丸3年もたたないうちに、増補版が刊行された。監修の廣瀬さんと編集委員会の活力に、まずは脱帽。増補版では、基礎編が簡略化され応用編が大幅に増えた。初版の応用編では水環境に関連したものが中心であったが、新たに道路・都市・公園がこれらに加わった。この原稿を書く前日に本書が手元に届いたので、詳しい内容の紹介は別の機会にしたい。いずれにしても本研究会の活動とも密接に関連する図書であり、会員各位からの紹介やコメントを、事務局としても期待している。もちろん、賛意、批判いずれをも歓迎

迎します。[谷田一三]

・「環境アセスメントここが変わる」、同書編集委員会(編著)、環境技術協会、本体8,000円：平成9年6月に公布された環境影響評価法の施行に伴って、環境アセスメントは新しい時代になるという。この概要については、本ニュースレター2号に岡本光之さん(環境庁自然保護極計画課)や足立敏之さん(建設省河川局河川環境課)の、判りやすい紹介もある。本書は、環境影響評価法の施行に対応して、島津康男さんを中心とする環境技術協会のメンバーが中心に作成した解説本である。ただし、「環境影響評価法が求めるもの」、「環境影響評価を越えて」、「役立つ事例」、「役立つ情報」という4部構成を見ても、第2部の「環境影響評価を越えて」を読んでも、単なる解説・紹介の範疇を越えている。全体として、実務者にも、興味のある一般読者にも役立つ内容となっている。とくに、「役立つ事例」はそれぞれの地域的問題・課題の、適切な入門書である。環境影響評価法では、従来のアセスメントに、スクリーニングとスコーピング制度の導入、さらにフォローアップが、事業と調査の流れに加わった。また、眼目は「オーダーメイドのメリハリのきいた環境アセスメント」であろう。その視点の基本的な考え方や事例報告も紹介されている。全体として見ればよくできた図書だが、カタカナ英語の多用と英語略語の多さには、少々ならず辟易する。輸入文化である環境影響評価であるため仕方がないのかもしれないが、適当な和語の開発も必要だろう。なお、ミティゲーションを代償措置と訳すのは、(法律制定側の)意図的な誤訳かもしれないが、評者はこの翻訳には賛同できない。事例集には、海上の森(愛知万博)、藤前干潟、漢那ダム、関西、中部国際空港など、進行中のものも含め、注目を集めている事業が収載されている。[谷田一三]

・「地理的情報システムを学ぶ」、中村和郎・寄藤昂・村山祐司(編)、古今書院、本体3,000円：地理情報システム(GIS)は、環境科学の分野でも新しい手法として注目されているが、評者も含めた初学者がその概要を知るのに適した図書は少なかったように思う。文部省科学研究費重点領域研究「近代化による環境変化の地理情報システム」の成果をまとめた本書は、多くの執筆者の共同作業でありながら、レベル、記述も含めて、初学者が地理的情報システムの全体像を把握するのに適した好書となっている。本文中にも、あるいは役に立つGIS関連情報の章にも、図書、雑誌、データ、ソフトウェア、ネット情報などが紹介され、これからこのシステムの導入を考えている研究・実務者にも役に立つ。本書の執筆者の多くは、地理学者であるため、生物情報や環境

情報を扱うものには、やや食いたらない面もある。この生態・生物分野での地理的情報システムの解説書の刊行も待たれる。最後に、本書を紹介してくれた三橋弘宗さん(兵庫県立人と自然の博物館)に感謝します。氏は、現在兵庫県下の生物的地理情報システムの構築を担当している、新進の生態学の研究者である。[谷田一三]

・「水循環と流域環境(岩波講座地球環境科学、7)」、高橋 裕・河田恵昭(編)、岩波書店、本体3,700円：流域を単位として水や物質の循環を考える必要性は改めて繰り返す必要はないだろう。しかし、この視点で水循環を上流から沿岸までを論じた図書は意外に少ない。本書は、水源から沿岸までの水系単位での循環を、水、土砂、水質などについて論じ、よくまとまっている。水危機、水循環の再生、水系の土砂収支、災害、排水再利用、ミティゲーション、今後の方向と、7章からなっている。水資源開発や地域開発の流域における循環に及ぼす影響について、多くの示唆的な事例が紹介されている。森林の保水機能と蒸発散機能とのバランスについては、森林性善説だけでは的確な対応ができないことが資料をもとに示されている。河川の砂利採取やダムの堆砂と、河床低下や海岸侵食の問題も、多くの興味深い事例が紹介されている。河川と沿岸域の統一的な理解と管理が必要なことは、水、水質、土砂について明確に指摘されている。もちろん、著者たちの議論のすべてに納得できるわけではないが、河川管理者も含めて彼らの主張は十分検討する必要がある。概論にとどまっている章もあるが、全体として入門書としては好著。[谷田一三]

・「日本産土壌動物、分類のための図解検索」、青木淳一(編著)、東海大学出版会、本体25,000円：同じ出版会から刊行された日本産土壌動物検索図説(1991年)の全面改訂版。1,000ページを超える大著で、39人の執筆者は、いずれも第一線の研究者である。ウズムシ類から昆虫まで、土壌動物の多様性が分かる。編者の青木さんの専門であるダニ目は、当然ながら充実しているが、それ以外にも、緩歩動物のクマムシ、甲殻類のソコムジンコ類、ワラジムシ類、ヨコエビ類、それにヤスデ類、昆虫のトビムシ類など、他に類書のない分類群の最新の成果が含まれている。土壌動物の分類検索に必須の図書であることはもちろんだが、水生動物や陸上動物の分類にも非常に役に立ちそうである。上位分類群(科から属)については、多くのグループで絵解き検索が試みられている。検索の使い勝手については、実際の材料をもとに判断すべきだが、本書が評者手元に届いたのは数週間前で、その評価をくさすまでには至っていない。[谷田一三]

・「水辺環境の保全—生物群集の視点から—」  
江崎保男・田中哲夫編、朝倉書店、本体5,800円：

この本は、植物および動物生態学者が共同して、ため池・水田・河川、そして周囲に張りめぐらされた農業水路の重要性を問うた書物である。ため池や水田は筆者にはなじみの薄い水辺空間であり、またそうした場に生育する植物・動物の生活史（環）は、きわめて興味深い内容であった。本書によって紹介されている生物群集は、水生植物、トンボ、カエル、魚類、二枚貝、水生昆虫、鳥類に及び、全体の半分以上がため池や水田および用水路などの農業に関連した内容となっている。このため、刈取りや底上げなどの伝統的な農事暦によって人為的に管理し維持することの重要性が述べられている。上にあげたほぼすべての生物群集について水辺環境に生息する種が記載されており、水辺がいかに多様な生息環境を提供し、水辺特有の種ばかりか、主として陸域に生息する生物にとってもライフサイクルの一時期に必要な場を提供しているかが理解できる。さらに、水質汚濁、圃場整備、河川改修、ダム建設による水辺環境の悪化が、生物データをもとに歴史的に分析されており、きびしい現状が明らかになっている。各章の最後には、今後の保全策について、各著者の考えがのべられており、繁殖場所のネットワーク化（メタ個体群の維持）、水域から陸域への移行帯および環境セットの保全、集水域全体の保全などのキーワードが浮かび上がってくる。[中村太士]

#### (5) 雑誌論文紹介

・「生態工学は河川を救えるか—科学/技術と社会との新たな関係を求めて」廣野喜幸・清野聡子・堂前雅史、科学、1999年3月号（特集“いま、科学の何が問われているのか”）

「現在、河川事業は治水・利水だけでなく、環境保全をも配慮しなければならなくなっている。治水・利水・保全などを全般的に捉えるべく、近年、生態工学という学問分野が発展しつつある。だが、そこにはさまざまな問題がある。河川生態工学の問題点を考察することで、転換期を迎えている科学・技術・社会の関係の現状と問題点、そして、ありうべき将来がみえてくる。」（論文紹介前文より）

以下、論文の小見出しを紹介します。

〈科学と技術の関係史における生態工学〉

〈科学/技術のモード論による問題提起〉

〈河川改修小史〉

〈大分県八坂川改修を例に一現実の場で何が問われたのか〉

〈専門委員会の役割と機能—課題がはっきりとみえてきた〉

〈専門家委員会から市民参加協働グループへ—社会とのかわりを前提とした科学/技術〉

〈科学/技術の側の問題〉

その1—普遍的正解の不在

その2—予測性の低さを受け入れる必要

その3—評価システムの必要性

〈社会システムの側の問題〉

#### 8. 事務局報告

事務局の窓の外は、参議院議員宿舎の庭の桜が二分咲き、4月初めには満開となります。会員の皆様も一度はお立ち寄り下さい。

98年度も終わりこの一年間の反省しきりです。このニュースレターNo.6の発行も、発送作業が一部4月に食い込んでしまい、会員の皆様にはご迷惑をお掛けしています。

もう既に、99年度の活動の準備が始まっています。竹門委員長が会誌の編集作業に追われ、また6月の理事会の開催、7月の札幌基礎講座の基本スケジュール調整、9月の第3回総会・研究発表会の日程・会場の予約と99年度もかなりパワフルな魅力ある年になりそうです。期待して下さい。各種お願い及び募集連絡を1ページに掲載しましたので、手帳にでもメモしておいて下さい。

[1999年3月30日現在会員数]

正（学生）会員 905名（他99年度入会者7名）

賛助会員 58法人

[研究会活動]

1999. 2.13 ・大阪研究実行委員会が豊岡のコウノトリの調査について打ち合わせ。

3. 4 ・第7回幹事会開催（事務局、5ヶ年計画等について）

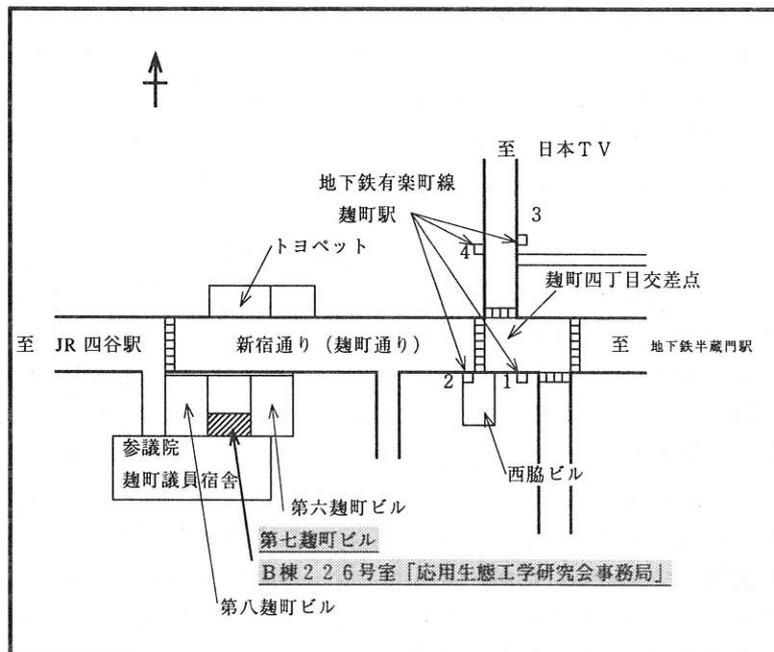
3.13 ・第6回理事会開催（中央大学駿河台記念館、5ヶ年計画、98年度総括、99年度活動方針について）

3.19 ・第3回総会・研究発表会日程(9/18～20)及び会場（科学技術館サイエンスホール）決定。

3.26 ・札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」（7/17～19）（案）決定。

3.30 ・ニュースレターNo.6発行

1999年度研究会スケジュール (1999年3月30日現在)	8月17日 (金) ・ 第4回会誌編集委員会 18:00～ (事務局)
1999年 (平成11年)	9月18日 (土) ・ 第3回総会・研究発表会 会場：東京「科学技術館サイエンスホール」
4月～5月頃 ・ 第8回幹事会	19日 (日) ・ 第3回研究発表会 (続き) 会場：東京「科学技術館サイエンスホール」
4月末 ・ 会誌「応用生態工学」2巻1号 発行予定	20日 (月) ・ 『霞ヶ浦現地見学 (仮称) 』
5月末 ・ 会誌「応用生態工学」2巻2号 投稿期限 (原著論文/総説)	10月末 ・ 会誌「応用生態工学」2巻2号 発行予定
6月3日 (木) ・ 第7回理事会 (中央大学駿河台 記念館)	10月末 ・ 会誌「応用生態工学」3巻1号 投稿期限 (原著論文/総説)
6月10日 ・ ニュースレターNo.7発行予定	11月10日 ・ ニュースレターNo.9発行予定
6月26日 (土)～28日 (月) 琵琶湖 ・ 「ヨシ原に関する国際ワークシ ョップおよび公開講演会」(共催)	12月末 ・ 会誌「応用生態工学」3巻1号 投稿期限 (短報/意見/書評)
7月17日 (土)～19日 (月) 北海道大学学術交流会館 ・ 基礎講座 『多様性と保全の生態学』	2000年 (平成12年)
7月末 ・ 会誌「応用生態工学」2巻2号 投稿期限 (短報/意見/書評)	2月10日 ・ ニュースレターNo.10発行予定
8月1日 ・ ニュースレターNo.8発行予定	4月末 ・ 会誌「応用生態工学」3巻1号 発行予定



### 応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル (2F 226号室)

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

[地下鉄有楽町線麹町駅 (2番出口) 徒歩3分]

[地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分]

[JR中央線四ツ谷駅徒歩10分]